

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370934

研究課題名(和文)近代中国地域像の基軸と変動 - 『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』の比較から -

研究課題名(英文)Studies of the change of Regional structure in Modern China, Based on the two Series of Geography of Each Province, Published in 1920s and 1940s.

研究代表者

藤田 佳久 (Fujita, Yoshihisa)

愛知大学・公私立大学の部局等・フェロー

研究者番号：70068823

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1901年上海に開学した東亜同文書院の学生たちが行った「大調査旅行」の調査記録をベースに、1920年代刊行の『支那省別全誌』全18巻と1940年代刊行の『新修支那省別全誌』(9巻目で戦争により未完)を取りあげ、中国の地域構造と地域システムを明らかにしようとした。

その結果、前誌は貿易を軸としはじめた長江沿岸地帯および沿海地帯と、自給経済的な内陸部地帯との2つに類型化でき、一方、後誌は辺境地帯の省が中心で、四川、雲南の2省と他の省に類型化でき、政府の地域開発計画により、貿易都市との経済圏形成が芽生え、貿易を通しての近代化が強弱の地域差はあるものの始動しはじめた姿がわかった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to make clear the regional structure and system by two edition series of geographical volumes of each province of China published in 1910s(first edition)and 1940s(second edition). These series were edited by the field work's documents written by the students of Toa-Dobun-Shoin College as a business school established in Shanghai,1901.

As a result, there were two types of provinces, in the first edition. One was the areas along main rivers and seaside areas which were supported by the foreign trade newly. The another was the areas in inland under the self-support economy. The second edition was published on the remoter areas in China. And also it had two types of province. One were the provinces of south-eastern part of provinces and the another were the western part of provinces. Both areas had just started to economic activities with main land of China, under the new regional development policies supported by central government.

研究分野：人文地理学

キーワード：東亜同文書院 東亜同文会 支那省別全誌 新修支那省別全誌 中国地誌 中国辺境地域 支那調査旅行 清国・民国地理

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究が対象とする『支那省別全誌』(全18巻、1920年代刊行、以下『全誌』と称す)と『新修支那省別全誌』(全22巻刊行予定が戦争で9巻で中断、以下『新修』と称す)は、戦前の20世紀前半期に刊行された世界初の中国省別地誌書である。その内容は生産活動から貿易、都市、交通、組織、流通など幅広い。しかし、これらの両省別シリーズは戦前の刊行であったため、戦後の研究者からは無視され、ほとんど研究対象にされてこなかった。各巻とも900ページから1000ページを上回る大著であり、これらの作品を検討することにより、清末から民国期の中国の地域情報を得て、近代化にさしかかりつつあった中国の地域構造とそのダイナミクスを明らかにすることが出来るのではないかと考えた。

(2)両省別全誌は、1901年、上海に国際的ビジネススクールとして誕生した東亜同文書院の学生である書院生が、ビジネスへのアプローチのため、最終学年に徒歩を中心として貿易品や貿易調査研究テーマとコースを設定したフィールドワークとしての「大調査旅行」の成果を基礎的資料としている。『全誌』はほとんど第5期から第9期の書院生の実地調査報告がベースであり、元々、従来日本人が入ったことのない地域をめざした。『新修』は書院生の記録をベースに専門家たちも加わった形での執筆、編集がなされている。書院生の「大調査旅行」は3~6ヶ月の踏査で、『新修』編纂時代はすでに600コースにも及んだ。書院生の調査は現地での実地確認によるイデオロギー抜きの内容であり、戦後いち早く台湾研究者がその価値を認めている。今日では中国も多大な関心を払っている。それだけにその記録を十分に利用できる可能性を考えた。

(3)『全誌』と『新修』で対象となった各省は、後者が戦争により9巻で中断したため、その時間変動を明らかにできるのは『新修』の各省についてのみである。それらの各省については、『全誌』の当該の省を比較することが出来、20年間の変動を明らかにすることができるのではないかと考えた。とりわけ、『新修』の各省は、中国のメインランド外の辺境に位置する省が多く、その辺境性の変動をふまえ、メインランドの変化も照射できるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は20世紀前半期の清国末期から民国時代に、上海にあった東亜同文書院生の中国調査報告に基づいて編まれた世界初の本格的な中国地誌である初版の『支那省別全誌』とその20年後に編まれた『新修支那省別全誌』の内容自体の検討と両者の比較を通して、

(1)ベースになった書院生の調査報告書および旅行日誌との関連性の検討、(2)地誌記述の対象とその方法論の検討、(3)両全誌の出版時期は、『全誌』が1917~1920年、『新修』が1941~1946年であり、その間に辛亥革命後の軍閥割拠の時期と北伐から日中戦争の激動期があり、記録された地誌の内容から基層部分と変動部分を考慮しつつ、中国の地域編成システムの変容、変化を検討、(4)それらをふまえ、中国における根源的な地域構造の存在と変容する地域像を統一的に把握し、今日の中国理解に資したい。

## 3. 研究の方法

(1)まず、『支那省別全誌』18巻と、『新修支那省別全誌』9巻を基本テキストとして設定し、この両全誌が出版された経緯と執筆者、参考ベースとした書院生のフィールドワークによる大調査旅行、関連文献などの基盤を明らかにする。

(2)両全誌について、その章構成の内容から編集の意図を検討する。両全誌はそれぞれ中国地誌的内容であることから、そこに展開される地誌論をほかの類書や外国地誌と比較し、その特性を示す。

(3)両全誌の章節を示す用語をキーワードとみなし、それによる各省の特性と類型化の試みを行う。

(4)両全誌のうち、『新修』を構成する各省は『全誌』を構成する同一の省とは20年間ほどの時間差があり、両者を比較することにより、20年間の変動を把握し、省内あるいは関係する省との地域システムの変容を検討する。とくに『新修』の各省は中国メインランドを取り巻く辺境地域が多く、その変動はメインランドの変動と対応関係にあると思われ、この辺境地域の変動を把握することで近代中国の近代化への始動を把握できる可能性がある。

## 4. 研究成果

(1)2回にわたって刊行された省別全誌は、『全誌』が第1巻から順に広東、広西、雲南、山東、四川、甘肅(付新疆)、陝西、河南、湖北、湖南、江西、安徽、浙江、福建、江蘇、貴州、山西、直隸の18省で、新疆は甘肅の延長上で簡潔にとらえられている。新疆は遠隔地で、1905年から2年間に及んで調査を行った2期生(1902年入学)5人以降は、時間的制約で書院生の大調査旅行の圏外になっていたためである。それは逆に、この『全誌』18省は第5期から第9期の書院生のフィールドワークの報告書の編集によって成立したことがわかり、この『全誌』の刊行自体、書院生の大調査旅行による報告記録を世に問うたものということができる。

一方、『新修』の9巻は、第1回から順に四川(上) 四川(下) 雲南、貴州(上) 貴州(下) 陝西、甘肅および寧夏、新疆、青海および西康の10省分を刊行したあと中断せざるをえなかった。刊行分だけみると、『全誌』では独立省になっていなかった辺境地域の新疆と寧夏、青海と西康がそれぞれ1冊2省ずつだが独立省として取りあげられている。寧夏、青海、西康へは書院生が「大調査旅行」でその一部を踏査しているが、上海からは距離的、時間的に困難な辺境地域であった。それなのに、これらの省が独立省として取り上げられているのは、刊行した東亜同文会の吉本仁、馬場鎌太郎ほかの専門家や現地を歩いた第7、11、19期の書院卒業生による執筆、編集が行われたからだ。吉本仁の手記にある。吉本は卒論となった報告書とそれに付随する多くの資料が参考になり、書院生の正確な記録に万感胸に迫ったとも記している。

(2) 章構成は『全書』については、「開市場」<sub>」</sub>「貿易」<sub>」</sub>「都市」<sub>」</sub>「交通・運輸」<sub>」</sub>「郵便」<sub>」</sub>「主要物産」<sub>」</sub>「商業・商取引」<sub>」</sub>「貨幣・金融」と続く。この構成は書院が世界初ともいえる国際ビジネススクールとして上海に設置され、貿易実務人材を中心に育成しようとした書院の設立趣旨に沿った形となっている。いわば書院生のための省別貿易取引専書といった体裁であり、ふんだんに第5期から第9期の書院生の卒論成果が活用されている。第5期から第9期は書院がまさに貿易人養成に本格的に着手した時期であり、書院生の卒論テーマもその分野にとくに集中していたことがわかる。

(3) 前記の章構成は若干順番の入れ替わりがあるが、その入れ替わりの中に各省の特性を打ち出している主旨をうかがえる。例えば、四川省は前掲したような「開市場」<sub>」</sub>「貿易」というキーワードから始まる省で、長江流域や、東・南支那海沿岸部など貿易が主導型だと判定した類型である。一方、「都会」<sub>」</sub>「交通・運輸」<sub>」</sub>「郵便・電信」<sub>」</sub>「生産」と続くのは陝西省など内陸の辺境地域の省に多いと判定した類型で、全書の各省は大きくみるとこの2類型に分けられる。そこには本格的な外国との貿易の有無を類型区分の基準とすることができる。

(4) (3)の2類型のうち、「貿易」主導類型は、すでに国外貿易で他国や他地域とつながり、上海や漢口をエンジンとする省間相互移出入の活発化を含む長江一帯の新たな経済圏形成の姿が浮かび上がってくる。一方、内陸、辺境地域では既存の都市や鎮を中心地として、郵便網や電信網の整備がすすみ始め、中心地階層をもった地域システムが編成されつつあることを読みとれる。辺境地域とは

いえ、次期の展開へのベースづくりが始められた段階にあるといえ、その後の交通網の整備次第では中心地階層の再編が十分予想される状況をうかがえる。

(5) 一方、『新修』では、地域概説のあと「交通」が重視され、次いで「都市」<sub>」</sub>「産業」<sub>」</sub>「貿易」<sub>」</sub>「歴史及名勝」(例えば四川省の場合)の章構成タイプと、「自然」の舞台を重視したあと、「人文(行政制度史、民族と文化)」<sub>」</sub>「都市」<sub>」</sub>「産業資源」<sub>」</sub>「商業貿易」<sub>」</sub>「財政・金融」<sub>」</sub>「交通・運輸・通信」<sub>」</sub>「歴史・名勝」(例えば陝西省の場合)の章構成タイプに分けられる。前者の類型には他に雲南省が該当し、後者には貴州、甘肅などより辺境地域の省が該当する。20年を経て、四川省や雲南省については情報量が多くなったとはいえ、実際の省内各地への入り方のルートをまず把握することがベースに置かれた面もある。

(6) 以上から、『全誌』、『新修』ともそれぞれ省構成に特色を持たせながら、20年後に刊行された『新修』は『全誌』の踏襲ではなく、20年間の調査研究の蓄積をふまえ、全くの新装版として旧版の『全誌』の内容をほとんど刷新させている。この20年間は書院生のフィールドワークである大調査旅行がより円熟したレベルに達したことの反映でもある。それだけに刊行直前で版下を東京空襲で焼失し、刊行できなかった『新修』の10巻以下が日の目を見なかったのが残念である。それが揃えば中国の各省が相互に連携しつつ近代化への経済圏形成や浮かびよる地域システムをもっと明晰に示せたのではないかとと思われる。

(7) 最後に、20年後の『新修』では、各省の章立てが揃えられ、地誌の体系化への狙いがうかがわれる点、また、民国期の蒋介石政権が、戦後の共産党政権による西部開発構想をすでに先駆的に辺境地域を対象に計画し、一部実施した影響が読みとれ、インフラ整備とそれをふまえた生産力向上の動きがうかがわれた点、辺境とはいえ、隣接する省や天津、漢口とつながりをもつ新たな経済圏形成とその重なり合う動きがみられる。それはインランドの発展と関連していることを十分示唆しており、1930年代~1940年代初めにかけて辺境地域が動態化し始めたこと、などをうかがえた点が、当初の本研究の予想を越えた新たな知見になり、今日の中国への連動がうかがわれることを付記する。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

藤田佳久、東亜同文書院生の大調査旅行における辺境地域調査、加納寛編『書院生、アジアに行く 東亜同文書院生が見た 20 世紀前半のアジア』、あるむ刊、所収、2017、pp.3-35

藤田佳久、東亜同文書院・同大学卒業生の軌跡と戦後日本の経済発展、愛知大学東亜同文書院大学記念センター報、査読無、vol.25-2、2016、pp.45-63

藤田佳久、幕末期に上海を訪れた岸田吟香の行動空間とコミュニティ形成、愛知大学東亜同文書院大学記念センター報、査読無、vol.25、2016、pp.5-34

藤田佳久、幕末期に上海を訪れた日本人青年藩士たちの行動空間 名倉予何人、中牟田倉之助、高杉晋作 愛知大学東亜同文書院大学記念センター報、査読無、vol.24、2015、pp.143-173

藤田佳久、幕末期に日本人が訪れ記録した上海像 納富介次郎と日比野輝寛の日記の場合、愛知大学東亜同文書院大学記念センター報、査読無、vol.23、2015、pp.91-114

〔学会発表〕(計7件)

藤田佳久、東亜同文書院と岡山県からの入学者について、岡山大学社会文化科学研究科研究集会、2017.3.26、岡山大学(岡山市)

藤田佳久、東亜同文書院・同大学卒業生の軌跡と戦後日本の経済発展、愛知大学東亜同文書院大学記念センター国際シンポジウム、2017.1.21、愛知大学(愛知県豊橋市)

藤田佳久、東亜同文書院から愛知大学へ、愛知大学創立 70 周年記念事業講演、2016.8.27、名古屋市博物館(名古屋市)

藤田佳久、東亜同文書院の大調査旅行から書院生が描いた東アジア・中国像、大阪産業大学国際学部開設記念講演、2016.6.26、大阪産業大学(大阪府大東市)

藤田佳久、東亜同文書院から愛知大学へ、愛知大学創立 70 周年記念事業講演、2016.8.27、名古屋市博物館(名古屋市)

藤田佳久、東亜同文書院の大調査旅行における辺境地域研究、東亜同文書院大学記念センター国際シンポジウム、2015.12.20、愛知大学(愛知県豊橋市)

藤田佳久、東亜同文書院生と書院生による東アジア大調査旅行、岐阜地理学会、2015.5.30、中部学院大学(岐阜県関市)

〔その他〕

ホームページ等

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

ホームページ

<http://www.aichi-u.ac.jp/orc/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 佳久 (Fujita, Yoshihisa)

愛知大学東亜同文書院大学記念センター・フェロー

研究者番号：70068823